
悪魔の森

緑青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の森

【Nコード】

N 6 6 4 2 W

【作者名】

緑青

【あらすじ】

そこには、『悪魔がすむ』と言われる森がある。

10年前、男の子が森に迷いこんだのは夢か、現実か？

そして森に誘われるように入りこんだカイトを待つ運命とは？

プロローグ

これは10年前の話。

短く切った黒髪を乱し、澄んだ青い目を不安と焦りで潤ませながら、一人の男の子が森の中を駆ける。

どうしよう。この森には悪魔が出るから行っちゃダメ、て言われてたのに。しかも帰り道分からなくなっちゃった。

男の子は昼でも薄暗い森の出口を探して必死に駆ける。誰か人がいないか探して叫ぶ。

しかし、体力の少ない子供はしばらくすると疲れて座り込んでしまう。男の子は不安で不安で、もっと小さい時、物心ついたときから肌身離さず身に付けていたペンダントを無意識に強く握る。

ガサッ

誰かが近づいてくる音に驚き、音のする方へ目を向ける。そこにいるのは、茶髪を腰までのぼし、茶色い瞳を持ち、真っ黒なコートに身を包む女性。男の子は不安そうな表情で女性を見上げ、女性は驚いたような表情を男の子に向ける。しばらくお互い目線をそらせずにいる。

不意に女性は空をみあげ、男の子を隠すように抱える。そして、耳元で口早に囁く。

ここに来てはいけませんよ。ここは悪い悪魔が出るから。貴方がここにいたことが誰にも気付かれないよう、しばらく魔法をかけてお

きます。時期がきたらいずれは解けてしまうでしょう。決してこの森に近づかぬよう。もしまたこの森に入ってしまったら、強く助けを求めて、ペンダントを握りしめて。では、おやすみなさい。

おやすみなさい、の声を合図に男の子は眠ってしまう。

目が覚めた男の子は、自分の部屋のベッドに寝ていることに気付く。

朝の風景

あたり一面に広がる草原、終わりが見えず地平線が草原を囲む。

空には月も太陽も雲もない、ただ青が広がっているだけ。

光源がないにも関わらずあたりは明るく鮮明に目に写る。

目の前には一本の青々と葉を繁らせた大木、そして地に差し込まれて立っている石盤。

石盤には何か文字が書いてあるが、汚れでよく読めない。いや、そもそも知っている文字で書かれていないかもしれない。

——ここはどこなんだろう——

窓から射し込む眩しい朝日に、先程までベッドで眠っていた青年は顔をしかめて目を覚ます。夢から覚めて目に入るのは、天井、乱れた布団。

むくりと起き上がったカイトは頭を掻いて考える。

もうこの夢を見続けて：1、2週間？あんな草原には行ったことがない。記憶にはない風景だが頭には鮮明に焼き付いていて、どこか懐かしい感じもする。別に見てて不愉快な夢な訳ではないが、さすがに連日見続けるのも不思議でたまらない。

カイトは二段ベッドの梯子をくだり、下で眠る相部屋の友人を起こし、朝食をとるため大広間へ向かう。

カイトに両親はいない。赤ん坊のころ現在棲んでいる孤児院の前に捨てられていたそうだ。その頃から肌身離さず身に付けている翠の石のペンダントと、赤ん坊の名前が”カイト”だと知らせる手紙と共に。

「今日は食うの遅いな」

カイトは相部屋の友人に言われて自分の食事があまり進んでいない

ことに気が付いた。

「あー…考え事。」

実際、夢の風景を思い出そうとしたりと考え事をしていた。

「カイトでも考えたりする事ってあるんだな！」

「うるせえな、能天気が考え事してて悪かったな」

お互いふざけながら憎まれ口をたたく。

カイトが捨てられたのが赤ん坊の時だったからだろうか、カイトに親を憎む気持ちは全くなかった。そして基本的には悩まない。だから孤児院では能天気だと思われる。

そこからすぐに食事を平らげ、カイトはすぐに自室に戻った。

カイトは現在17歳。孤児院で最年長だ。そろそろ職を見つけて孤児院を出ていかなければならない。孤児院で働く人たちはもう少しいても平気というが、そういうわけにもいかないだろう。

カイトは顔を洗い、ボサボサだった短い黒髪をなでつけ、シャツにジャケットを羽織って準備を整えた。

持ち物は…手ぶらでも特に問題はないか。

窓から外を見ると、これから出掛けるべき町が見える。その背景にあるのは、悪魔が出ると言われる森。もはやカイトはただの脅し文句としか思っていないが、今日は何だか森を見ているだけで妙に胸がざわついている気がする。森を遠目で見ているだけなのに、それだけで引き込まれていくような…

思い過ごしと首を振り、窓に背を向け扉に手をかける。

仕事探しに

部屋を出たカイトを出迎えたのは、朝食をとるべく大広間に向かって走る、カイトにとって弟や妹のような存在の孤児院の子供たち。

「カイト！！朝御飯の時間だよ！！！」

「悪いなあ、もう食べちゃったよ」

「食べるの早いーっ一緒に食べようと思ったのに…」

「カイト、今日もう出掛けちゃうの…？」

「ああ、帰ったら遊んでやるから、いい子にしてな」

「わかった！約束だからね！！」

カイトは子供たちに申し訳なく思いながらも誘いを断り、玄関を指す。

「今日も早いですねえ。」

「お、院長、おはようございます、と。」

玄関に待っていたのは、カイトが小さい頃から面倒をみてきた現在の院長。カイトが拾われた当時はまだ若い女性職員だったが、今ではすっかり院の顔となっている。カイトにとっては親のようなものだ。

それだけ、カイトが来て長い時間がたったということだ。

「今日は、仕事探し、ですか。」

「ああ、そう。そろそろ成人だから、見つけるだけでも見つけておかないと。」

院長は寂しそうに、しかしカイトの成長を嬉しくも思い、目を細める。

「そうですねえ、もう少しくらいここにいてもいいし、いざとなれば、ここで働くことも可能なですよ？」

院長の言葉にカイトは首を横に振る。

「あー、まあ仕事が決まるまではここに置かせてもらいたいけど、決まり次第出ていくよ。あんまり長く居るのも悪いし。それに、ず

つとここで生活してただろ？やっぱりここで働く人っていうのは、ちゃんと外の世界を知ってる人の方が適任だろ。俺は今すぐここで働くべきではない、って思ってる。」

カイトの意志の決まったような口調に院長は頷いて応える。

「そうですか、ならば私は強く止めるつもりはありませんからね。ただ、ここはあなたが育った場所、これからしばらく一人で生きていくことになっても、辛いことがあっても、ここがあなたの心の支えになることを祈ってますよ。」

院長が言うと、カイトは軽く一礼して、

「じゃあ」

また軽く返事をして、町に向かうため玄関をでる。

院長はそんなカイトの背中を親のように見守る。

自分のこの役目もそろそろ終わると、感じながら。

入れ替わった目的

町に出たカイトは求人情報を探そうと思った。
しかし集中できない。

近い。

町の背景に森がある。孤児院にいたときより、森に近い。
普段、町に来ても何にも気にならなかった森なのに。

大きな風が吹いていないにも関わらず、森の木々はザワザワと音を立てている気がする。

気がするだけ。ただの気のせい。

カイトは自分に言い聞かせる。無意識にペンダントを握り、気持ち
を落ち着かせようとする。

しかし、落ち着くどころか、町を歩くたびに森が近づいてきている。
いや、カイトが森に近づいているだけなのだが。
全てが無意識のうちに進行している。

俺は、仕事を探しにここに来てるのに。

必死に気を紛れさせようと、町をみわたすも、町に流れる音は全て
森の木々が発する音を妨げる騒音にしか聞こえない、町並みは森を
視界から遮る障害物にしか見えない。

あの森には悪魔がでるから、入ってはいけないよ。

孤児院で子供の頃よく言われた。正確には、悪魔が出る、というのは噂であって、もしくは脅し文句であって、実際に見た、といった話は聞かない。

ただ、誰が森に入って抜けようとしても、いつの間にか最初森に入った場所に戻ってしまっているのだ。

森の向こうに行くためには森を避けて迂回しなければならず、迷子の行方不明者をなくすために、悪魔、という存在がつくられたらしい。

つまり、いくら悪魔が信じられていなくても、森に進んで近づく者はほとんどいない。

カイトは歩き続けている。

それが、カイトの現在の意思ではなくても。

よみがえる10年前

カイトは目の前にある木々を、果てがどこまでかも分からない森の奥を睨む。

本当に、何で俺はここにいるんだよ…。

一人ため息をつくが、周りに全く人がいない。カイトのため息を聞くものはいない。

カイトは一步、森に踏み出す。

まるで最初からそうするつもりだったかのように、何の躊躇もなく町に戻っても、どうせ仕事探しに集中できないんだし。ならば、少し院長の言葉に甘えさせてもらおうか。

自分の都合のよさに少し笑いながら、カイトは森を歩き始める。

ここに来てはいけませんよ。ここは悪い悪魔が出るから。

ふと思い出す、10年前。カイトは一度、この森で迷子になったことがある。

院の職員の、大人の言うことを聞かず、好奇心で森に入った。当然、カイトは森から出られなくなった。その時に出会った女性に言われたのだ。

貴方がここにいることが誰にも気付かれないよう、しばらく魔法をかけておきます。

…ちょっと待て、何で10年前と断言できる？ しかも言われた言葉、女性の姿、まるで昨日のことのようにしっかりと思い出せる。

それに、この森にはあのとき自分とあの人以外にも誰かいたのか？魔法？

時期がきたらいずれは解けてしまうでしょう。決してこの森に近づかぬよう。

そう、あの時も今と同じ、久し振りに町に来てみたが町のことよりこの森の方が気になって…

どうしてこんなことをすっかり思い出せるんだ？森を進むごとにカイトの当時の記憶はより鮮明になってき、歩調は自然と速くなっていく。

もしまたこの森に入ってしまったら、強く助けを求めて、ペンダントを握りしめて。では、おやすみなさい。

気づいたときには、後ろを見ても、前を見ても、同じ風景しか見えない。帰り道も、抜ける道もさっぱり分からない。

——— どうしよう、どうすればいい？

そして記憶の中の言葉の通り、カイトはペンダントに右手をのぼす。

その時、カイトの腕を何かがかする。腕を見ると、服に一直線の亀裂がある。そして血がにじんでいる。

カイトが正面をよく見ると、少し離れた木々の中に人影が一つある。フードつきの赤いマントを羽織っていて、フードを深くしているの

で、人の顔も体格もさっぱり分からない。あまり近付いてはいけ

ないということは本能的に察知できる。人影は一步カイトにちかづき、それにあわせてカイトは一步後ずさる。

人影が手を天に突き上げる。するとその手に光が集まってくる。そ

して、光の玉となったそれをカイトに向かって投げつける。

何が起こっているかも分からず、どうすればいいかも分からず、右手をペンダントにのばして立ち尽くすカイトに、それはかなりの勢いをもって接近してくる。

ペンダントを握る右手の力が強くなる。

そのとき突然、カイトの視界に、カイトと光の玉の間にまた別の人が割り込む。

新たな人影は腰までの茶髪と黒いコートのすそをふり、手にしている大きな鎌を回す。

その時、光の玉は2つに割れ、霧散する。

「失せなさい」

鎌を持つ人が一言放つと、奥の人の気配は消える。

鎌を持つ人がカイトの方に向き直る。

カイトは目を見開く。

腰まで伸ばされた茶髪に、茶色の瞳。黒いコートを着た女性。

その人は10年前、カイトが森で出会った人。

邂逅と記憶

2人は動かない。女性はカイトの目をじっと見つめたまま。カイトはその目を見つめ返して動けない。

カイトはふと疑問に思う。

この人、10年前と見た目がまるで変わってない…!!

10年前の記憶が正確なわけではない。先程は確かに言われた言葉も、出会った人の容姿も、明確に思い出せた…つもりであった。今も昔も20代くらいの…若いまま。

いくらなんでも10年前からまるで老けていないのは一目瞭然なことでだ。

…いや、やっぱり俺の記憶があいまいなだけか…?

ひとりで考え事を始めたカイトだが、女性の持つ鎌が目に入り、次は自分が襲われるのでは、と身を固める。女性はそんなカイトを見て、鎌を手放す。鎌は光の粒となって散らばる。

カイトは驚きで何度か瞬きをする。

「ケガ、なさっていますね。」

女性はそう言うと、カイトの右腕の傷口に手を添える。

カイトは傷口が痛みによるものではない、もっと優しい熱を持つのが分かる。女性が手を離すと、傷はふさがっていた。

「あ…ありが、とう…?」

カイトはとりあえず礼を言うが、頭は状況に追い付いていない。

森に入ってから、今までとは違う世界に来たみたいだ。

何か光を集めるやつもいるし。

鎌は勝手に消えるし。

傷はすぐに治るし。

まるで、魔法みたい――

そこまで考えて10年前の言葉を思い出す。

目の前にいる女性が、放った言葉。

ここは悪い悪魔がいるから。

しばらく魔法をかけておきます。

時期がきたらいずれは解けてしまうでしょう。

まさか、本当に、魔法とか悪魔とかが存在するのか…?!

もし本当にそうだとしたら、ここにいる人は迷子でない限り悪魔かもしれない。とにかく、ここに長くいてはいけない。

しかし、この女性は2度も助けてくれた。

少なくとも、変な行動を起こさなければ危害は加えられないだろうな…。

「あ、あの、俺、この森で迷ってまったんですけど…出口までの道、分かりますか？」

カイトは出来るだけ丁寧に質問をするが、自分のこの話し方になぜか違和感を覚える。

「…残念ですが、現在は道案内をすることは出来ません…」

「…え、じゃあ、出られない…?!」

どうしようか、出られないなら町には戻れない。帰れない。カイトは焦る。

「今は森の外へ続く道が上手く紛れてしまっていますので…」

「…え、どういうこと？」

「要するに、私や貴方が外に通じる道を発見出来ないような魔法をいつの間にかかけられてしまったようです…私というものがいなが

ら阻止出来ず：申し訳ありません」

やっぱりここには魔法とか存在するんだ：ここでカイトはふと疑問に思う。

なぜ、この女性は自分を助けるのか？

話からして帰れなくなったのはこの人のせいではないのに、なぜ謝るのか？

「そ、うですか、じゃあ、もしかして、しばらくはこの森にいなきやいけない：？」

「そうなりますね：しかし、こうなった以上、この魔法を解くしか方法はないのですが：どうやら、魔法をかけた本人に直接解かせるのが一番手っ取り早いようです」

丁寧に言う女性。だが、内容は結構カイトにとっては深刻なもの。

「これから私は直談判に行こうと思います。相手は大体予想がついていますので：しかし、貴方をここで一人待たせておくわけにもいかないのですが：先程のようなこともあるでしょうから：」

と、いうことは、さっき消えた人とか魔法みたいなのって、俺にとってはかなり危ない状況だった：？！

しっかり自覚したからこそまた恐ろしくなり一的人身震いするカイト。森を動き回るのも危険だが、一人でいるのはただの人間のカイトにとってはもっと危険なことに思えてくる。

「俺、ここで待ってるべき：かな？」カイトは恐る恐る聞く。

認めたくはないが、現段階のこの森でカイトほどお荷物になるものはないだろう。

ここで待ってろと言われても仕方がないのだが、やはり自己防衛も大切で、この女性と共にいることが最も安全に思える。

「いいえ、ここで待っていても貴方が危険な目にあう確率が高まる

だけでしよう、私と共にいた方が何かと便利でしょうから、貴方さえよろしければ、共に行動しましょう」

「ええっ、いいのか?! っ——えっと、いいんですか? ついていっても?」

まさか、自分の考えを見透かされたように女性の方から誘ってくるとは思わなかったカイトは驚いて聞き返すが、うっかりタメ口になってしまっただけ聞き返す。

そんなカイトを見て女性は右手を口元にあてクスクス笑い

「はい、もちろん、そして私にそんな気を使って話す必要もございません。」

と、答える。

「そ、そうか? じゃあ、普通に喋るよ。」

なぜかこの女性に対しては明らかに年上にも関わらず、普通に話した方がしっくりくる。

「あ、自己紹介まだだった。俺は、カイト」

「はい、そうでしたね。私は、リナ、と申します。」

そう答えるリナの顔から、カイトは何故か寂しさが伺える気がした。

道中

とりあえずカイトは森のことを全く知らないので、リナが歩いた後をついていく。

森の中の道は意外と平坦で、草木の障害物さえ上手く避ければ割と体力が削られることもなく歩くことができる。

しばらく黙って歩いていたが、カイトは先程の疑問をリナにぶつける。

「なあ、えっと、…リナ、さん？」

「リナ、で構いません」

「そうか？じゃあ、リナ、10年前、俺とこの森で会ったこと、あるか…？」

「そのことなら、目的地についたらお話いたします。」

カイトはこの回答で、10年前に会った女性がリナであるという確信がもてた。

リナ、と呼び捨てにし、慣れた口調で話したりといったことに、どこか懐かしさを感じるのはそのせいかもしれない。

でも、何で今話さないんだ…？

「ふーん、じゃあ、何で…」

何回も、助けてくれた？

と聞こうとして、止める。

自分は現在、リナに助けてもらわなければ何もできない。

だからこそ、ここで理由を聞いたら…何か気まずい。

それに、気まぐれだった場合、もしかしたらここで放置をくらうかも…

そんな風にカイトが考えていることを知ってか知らずか…というより、カイトの考えを読み取ったかのようにリナは言う。

「…そうですね、私がやりたくて今行動しているだけです、貴方がどうお思いになっても、これは私の意思ですから、貴方が気負う必

要はありません。」

「そ、そっか…」

さらりと言われてしまっただけは何も言い返せない。

それに何故だかりナは信用できる気がする…根拠はないが。

歩きながら、カイトは空を見上げる。

すでに日は昇りきっていて、あとは地平線に向かって降りるだけ。

森についた時刻なんて確認していないが、朝はやくに孤児院を出たのだから、かなりの時間この森にいることになる。

カイトは自分の好奇心を呪うが、そんなことを思ったところで、事態が好転するわけでもないの、静かにリナの後についていくしかない。

「…あの、大丈夫ですか？」

リナが静かになったカイトに向かって言う。

「大丈夫。」

「もう少しで目的の場所につきますから。」

そう言うのと、またもくもくと歩きだす。

実はカイトはもうひとつ、どうしてもリナに聞きたいことがある。

——リナは、悪魔なのか？

少なくとも魔法の存在は知っているようだし、魔法も使えるのだろう。

でも、魔法が使えるれば悪魔になる、とも限らない。最低でも普通の人間ではなさそうだが。

しかし、この質問に関しては聞くにはそれなりに勇気がある。

今聞いてもいい質問なのか。

それを指し抜いても、カイトはもつとりナと会話すべきか、とも考えたが、特にこれといった話題も見つからず、結局は互いに無言で歩く。

しかしそれだけでも特に気まずいとは思わなかった。

「着きました」

リナが突然止まる。

足元を見ながら歩いていたカイトは足を止め、顔を上げる。そこには、森の木々よりかなり背の低いログハウスがある。つまり、リナのいう目的地についたのだ。

ログハウスと男

リナはノックもせずにログハウスの扉を開ける。
いや、開けようとしている。

「…開かない…」

「ええっ?!これってもしかして、無駄足…?!」

カイトは驚いて言う。

リナは少しうつむいて首を横にふる。

「いえ、無駄足ではありません、一步、後ろに下がって下さいませんか?」

そう言われてカイトは素直に扉から離れる。

次の瞬間、リナは扉に向かって蹴りをいれる。

と、ものすごい勢いで扉が吹き飛ぶ。

驚いたカイトがよく見てみると、扉は真ん中で2つに折れている。

え、え、え、一応、今までの話からすると、ここは少なくともリナの家ではないわけで、つまりリナは人様の家(の一部)を壊したわけで…

果たしてこれはいいことなのか、と一人でぐるぐる考えているカイトに向き直ったリナは涼しい顔をして

「では、入りましょう」

と促してくる。

「入りましょうってか、いいのか?!扉壊れてるぞ!!」

「大丈夫です、素直に開けない方が悪いのですから。」

カイトの言葉をさらりと受け流すリナ。

とはいえ、せっかく目的地についたというのに、入らずに帰るわけにも、ここで突っ立っているわけにもいかないので、とりあえず2人はログハウスの中に入る。

外観は部屋が1つあればいいといえるくらい小さい。

しかし、中に入ると明らかに外観より広い1部屋が出迎える。

その部屋を囲むように扉が3つ。出入口を含めれば4つになるが。

そして、その中央には大きな四角いテーブルとイス、天井には小さなシランプに火が灯っていて、いくつか空中に浮いている。ちなみにカイトの足下には壊れた扉が落ちている。

「でてきなさい、ナユタ！迷いの魔法かけたのあなたでしょう！！」

リナが出入口に向かって手をかざしながら言う。

出入口は特に何かが変わったわけではないが、リナの手が光ったところを見ると、何か魔法をかけたに違いない。

「ああ、リナ様ですか…」

出入口付近にいるカイトから見て左の扉から一人の男がでてくる。

赤い長髪を後ろの低い位置で1つに結んだ30くらいの男だ。タレ目が細く、どこか頼り無さそうな印象。

「ナユタ、やっぱりあなたね。あんまり面倒くさい魔法かけないでくれる？」

「リナ様には面倒くさい魔法でしょうが、そんなに手はこんでませんよ。貴女が力ずくの魔法が得意なだけです。」

ナユタと呼ばれた男は壊れた扉を見て言う。

そして、そのまま視線をカイトの方へたどらせる。

「あなたは…?!」

「森で迷子を保護しました。だから魔法を解きにきたのです。」

何かを言いかけたナユタを遮ってリナが言う。

リナの目をみたナユタはそれ以上言葉は続けず

「そうですか、しかし、今から森を出歩くのは賢明ではありません、しばらくここで休憩なさるのもよろしいのではないかと。」

「…まあ、確かにそれもそうですね。」

リナに言われて、カイトは2人に促されるままに机に向かう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6642w/>

悪魔の森

2011年10月16日21時53分発行